アーティスト・河明求について

東京造形大学美術学科教授・彫刻家　大橋 博

韓国人アーティスト河明求に会ったのは５年前であった。ロンドンのロイヤルカレッジでの留学を終え、新たな制作場所を求めて現在の活動拠点である「丸沼芸術の森」へやってきたのだ。しっかりした日本語で自分の持つアーティスト像を語る河の様子は、最近の日本の若者にはなかなか見られないせいかとても新鮮に感じられた。ちなみに「丸沼芸術の森」とは東京の郊外にある絵画、彫刻、工芸などの美術作品制作に関わる作家達の共同アトリエであり、現在１０名が在籍している。

河が丸沼を知ったのはロンドンでの偶然の出会いからのようで、以前から日本の民芸運動に関心を持ち、特に河井寛次郎や富本憲吉の制作態度には深く共感を寄せているようであった。

私とは最初から気が合い、お互いのアトリエでよく食事を取りながらいろいろな話をした。その中で特に印象的だったのは彼の実直な人柄と変化を求める制作態度だった。パブロピカソの言葉に「他人を模写するのは必要なことである。しかし自分を模写するのは哀れなものだ。」というものがある。河の意識は常に他人、あるいは社会から得られるエネルギーに注意が向けられているように思う。

例えばロンドン時代から制作されたポケットスクエアのシリーズだが、外国人から見たイギリス社会の歪みと憧れを混在させ、機能を排した器をつくっている。ボロ雑巾のような表情を持った陶製の紳士の象徴は美術品として壁にかけられて展示されたのだった。日本にきてからは韓国と日本の持つ土地の記憶を妖怪というモチーフで繋げてゆくといったことを展開している。妖怪はそれぞれが人間臭いストーリーを持っており、彼の台本に従いその形態が決定された作品からは、どこかユーモラスで情けない人間への視点を感じる。

現在、「丸沼芸術の森」では河を中心としながら韓国との文化交流事業としてアーチストインレジデンスを行っており、年間 3〜4 名作家を招聘している。さらに数回の交流展を行いながら他のアーティスト達とも親睦を深めている。このように河の活動は作品制作のみならず人間関係の構築にも及んできている。また現在も秘密の計画が進行中らしい。パブロピカソはこうも言っている「冒険こそが、私の存在理由である」と。